0.5 『競伊勢物語』に就きて

『浮世絵芸術』第四巻第十二号　昭和十年十二月十三日発行

此十月、明治座に中村吉右衛門一座の歌舞伎が懸り、その一番目狂言に珍らしくも、『競伊勢物語』の「春日村」が上演された。随分久し振りの上演で、最近では、大正四年八月に帝国劇場で、やはり吉右衛門が演したとの事である。

されば、東京では実に三十一年振りの上場である。又大阪でも以前はよく、雁次郎が演して居たのであるが、其時に当り何時も、「小由」の役をして居た先代中村梅玉が歿してから、小由役者がなく、全く出なくなってしまったのである。兎に角近頃の歌舞伎の演し物としては、出点に於ても見物であるので、早速明治座へ馳せ付けたのであるが、今其時の所感を次に少し書く事にする。が其前に、『競伊勢物語』其物に付き少し調べた事を述べて見ようと思う。

扨此『競伊勢物語』と云う芝居は、安永四乙未の四月大阪中之芝居にて、座本嵐松治郎の芝居に、奈河亀助が元祖中村歌右衛門の為に書き卸したものであるが、院本も同時に刊行されたと云う事である。而して、其作意は大近松作の『井筒業平河内通』に負う所多く、即わち、時代を王朝に藉り、惜仁親王と惜喬親王の皇位諍いに絡り、井筒姫、業平の恋情、総の有常の忠義、忍ぶ文字摺の伝説等を取り入れ全五段に綴った物であるが、その中の眼目は、やはり、「春日村小由住家」で、全体から云うと、三段目に当る所である。一体此様な演題は、王朝物とて重い物とされて居る。而して、其初演当時の番付も、台帳も幸持

合せて居るから、それに依り、初演の時の役割を左に記すと、

未四月五日ゟ新きやうけんはんつけ

座本　嵐　松　治　郎

大和に筒井里
河内に生駒山　競伊勢物語（ハナクラベイセモノガタリ）　五冊物

一、かつら金吾　中村十治郎
一、ねざめ御前　市山源之助
一、生駒姫　藤井花咲
一、ほり川大臣　市山助五郎　二役
一、やつこ常平　市山助五郎
一、いするが藤太　三桝他人　二役
一、どらの鐃八　三桝他人
一、在原業平　三桝徳次郎　四役
一、宿弥女房通路　三桝徳次郎
一、春日野豆四郎　三桝徳次郎
一、むらさめ　三桝徳次郎

一、あら川宿弥　藤川柳蔵
一、津の国お波　中村喜世三郎
一、名虎のぼうこん　中村歌右衛門（二役）
一、紀有常　中村歌右衛門（二役）
一、惟仁しんのう　市川吉太郎
一、大納言宗岡　市川宗三郎（三役）
一、あがたの広貫　市川宗三郎（三役）
一、高安左衛門　市川宗三郎（三役）
一、井筒姫　尾上粂助（三役）
一、藤太女房関の戸　尾上粂助（三役）
一、春日野信夫　尾上粂助（三役）
一、惟喬しんのう　坂東岩五郎
一、孔雀三郎　藤川八蔵
一、仕丁和田作　三桝大五郎（二役）
一、春日野小由　三桝大五郎（二役）
一、二条の后　座本嵐松治郎

三味線　岸村藤助

太夫　宮古路一仲
宮古路生駒太夫

浄瑠璃　豊竹佐賀太夫
豊竹初太夫
竹本曽和太夫

三味線　鶴沢四郎吉
野沢常五郎

吉井勢平
奈河直蔵

狂言作者　奈河亀助
奈河丈助
辰田万作

頭取　中川正五郎
市川宗三郎

とあり、丸本の役名と同じであるが、丸本の方には此外に、浄瑠璃役割として、左記の如く掲げられてある、

壱冊目　口　豊竹佐賀太夫
　　中　豊竹初太夫
　　切　竹本曽利太夫

二冊目　豊竹初太夫

三冊目　口　豊竹佐賀太夫
　　中　豊竹初太夫
　　切　竹本曽和太夫

四冊目　ワキ　宮古路生駒太夫

道行　太夫　宮古路一仲
　　三弦　岸邑藤輔

五冊目　口　豊竹初太夫
　　切　豊竹佐賀太夫

之を初め、色々考えて見たが、此狂言が芝居に書き卸されたのは、前にも云った通り、安永乙未四月で、院本も同時に刊行され、操に上場されたのは同年八月、都万太夫座に於いて、豊竹島太夫竹本春太夫が語ったのが初めであると云われて居るが、一説に、同年四月に既に操は上場されて居ると云われて居るから、それが此役割ではないかと思って居ったのであるが、三段目の竹本曽和太夫と云う人等から考えて、大分疑った処、たま〳〵当時芝居の番付（前記の）を入手して、その終りに、はしなくも、曽和太夫、初太夫、佐賀太夫及ひ宮古路一仲等の名前を発見して、此役割が「チョボ」の役割であった事を初めて知った訳である。初演当時の模様は伴の如くであるが、此芝居は大入大当りであった様で、其後八年目の天明三癸卯四月に、その二度目の上演を、同じく大阪中の芝居、座本嵐他人にて上演され、「いかるが藤太」と「紀有常」を尾上菊五郎「名虎の亡魂」、「小よし」を加賀屋歌七、「関の戸」、「井筒姫」、「信夫」の三役を山下八百蔵、「女房通路」、「在原業平」、「豆四郎」の三役を三桝徳次郎（以下略）等が主なる役割であるが、其後も、寛政八丙辰八月に、同じく大阪中之芝居にて、又享和三癸亥三月、大阪角の芝居にて上演され、自来屡々舞台にかゝって居り、明治に入ってからも、彼の中村雁次郎や先代中村梅玉等が三回程上演して居るのである。

しかし、江戸の方では、前にも一寸云った如く、受けの好くない狂言であったから、その上場度数は極めて少く、先ずその最初は、文化六巳己九月中村座で、役割は、「荒川宿弥」と「紀有常」が高助、「小由」と「名虎の亡魂」と「行平」が歌右衛門、「信夫」、が仙女「女房通路」が路考、「いかるが藤太」と

「仕丁和田作」が三十郎、「豆四郎」と「業平」が吉三郎等であったが、此時は九月十七日が初日で、僅か十二日後の同二十九日よりは、大切の「廓文章」は居据わりで、一番目の「伊勢物語」を「男一疋嫁入献立」（黒船忠右衛門）に変更されて居るから、それだけでも推して知るべしである。其後はずっと下って、嘉永三庚戌五月河原崎座の上演で、此時は海老蔵が「名虎の亡魂」、「いかるが藤太」、「紀有常」の三役、粂三郎が「在原業平」、豆四郎」、「生駒姫」の三役、九蔵の「小由」、等であるが、海老蔵はこの前年、即嘉永二巳酉七月京都北側芝居で「紀有常」を務め、同じく八月大阪中の芝居で「名虎の亡魂」、「いかるが藤太」、「小由」の三役を務めて居り、嘉永庚戌年は追放赦免になって九年目で、江戸へ帰ったのであるから、演し物から云って大阪土産と云う様な心があったものと思われる。それから、その次はもう明治三十六年市村座で、延二郎（今の延若）の有常に、福助（先代梅玉）の小由で上演され、次いで大正四年八月の帝国劇場の吉右衛門となるのであるから、此度の上演は、江戸では五回目と云う事になる。大正四年八月の時は、序幕に「逢坂山毘沙門堂ノ場」があり、「息女駒姫実ハ黒駒八郎」が中村東蔵（現大谷友右衛門）、橘左衛門尉康頼が十三代目の守田勘弥、真巌坊玄哲が尾上菊五郎、奴浪平が中村吉右衛門という役割であるが、此場は後の補作であり、直接本筋に関係のない場である。二幕目が「奈良街道玉水ガ淵の場」で、大詰が「春日野小由住居ノ場」、「同奥ノ間ノ場」で、主なる配役は、「信夫」が故三世菊次郎、「豆四郎」が三津五郎、「どらの鐃八」が新十郎「小由」が故松助、「有常」が吉右衛門、「業平」が三津五郎、「井筒姫」が菊次郎であった。此時は松助の小由が大分不評を買ったとの事である。今後の上演の所感を述べる前に一寸操の方の『伊勢物語』につき一言して置き度い。此狂言が操に初めて上場されたのは、前述の如く、安永四乙未の八月都万太夫座で、役場は三段目切の「春日村」は島太夫であると

伝えられて居る。又是も前に一寸述べた事であるが、此八月以前、即同年四月に既に操に上場されたとの説もあるが、座も役場も未詳と云う事になっているから、此の方の上場の事実は信じ兼ねると思うのである。而して都万太夫座に於ける初演の時の役場も、「春日村」は島太夫とが一日替りで勤めたとの説もあるが、「義太夫年表」には左記の通りになって居る。即、

八月二日　大和に筒井里　河内に生駒山　競（ハナクラベ）伊勢物語

名代　都　万太夫

太夫　豊竹島太夫
　　竹春本太夫

大序　豊竹阿蘇太夫　　口　竹本繁太夫

初中　竹本津太夫　　三　次豊竹三好太夫

次　竹本繁太夫　　役　中豊付粂太夫

中　竹本宇佐太夫　　切豊竹島太夫

段　中豊竹井筒太夫　　目

切　竹本絹太夫　　道行竹本春太夫

二口　竹本律太夫
段中　豊竹粂太夫
目切　竹本春太夫

ツレ　豊竹三好太夫
四口　豊竹伊奈太夫
段中　竹本春太夫
目切　竹本絹太夫

五段目　竹本宇佐太夫

三味線　竹沢弥七
以下略

とあり、茲では春太夫は「二の切」、「道行」、「四の中」の三役になって居るが、此役割は番付に依ったものとされて居るが、少し疑わしい様に思うのである。殊に紋下太夫が島太夫と春太夫との二人になって居り、「春日村」の役場が両人交替等の説あるから、或いは其の方が真実か、又は「春日付」の端場の彼の「はつたい茶」の件を春太夫が勤めたのであろうか共、其「風」から考えると想像を巧ましゅう出来るのである。尚茲の島太夫は二世若太夫の島太夫で、二代目を襲名して後再び旧名に戻った時である。島太夫としては、初代二氏の両説があるが、後者の方が正しい様である。又春太夫は初代で、斯界前後なき名音と謳われた名人である。

兎に角初演は斯の如くであるが、其後二代土佐太夫の播摩大掾が鶴沢寛治と共に勤め、大いに此曲の改

善を施し、好評を得て度々語ったので、現今では、其「風」が大分伝わって居る様に思われるのである。先年大阪文楽座で、豊竹古靱太夫が此「春日村」を上演したが、其節もやはり、「土佐太夫党」に基づいた様である。又近世では三代目長登太夫も語り、明治に入っては、初代古靱太夫や、摂津大椽等も度々語って居り――大椽が彼の名人団平を相三絃とした東一回の演し物が此春日村であったと思う。――其「風」を残したと云われて居るが、そうなると「芸格」が大分狭くなるし、大椽の芸風を類推して、「春日村」の「風」を改善し得る様にも思われぬから、やはり「土佐太夫風」を以て主とせねばならぬ。そして此「風」は歌舞伎にも輸入され、大体現今に及んで居るものと思われるのである。

扨、今度の上演であるが、之を一番目に据え、序幕「奈良街道茶店」、「同玉水カ淵」、二幕目「春日野小由住居」、「同貞ノ間」と分けている。先ず之等の場の概略と云うと、惟仁親王と惟喬親王との皇位諍いに、それになくてはならぬ御鏡を惟喬親王方の加担者が盗んで何れへか隠してしまったが、奈良街道の玉水の淵が日夜怪しく鳴動し、殺生禁断の淵とて鳥類の羽ばたきが利かなくなるので、必定御鏡の在所に違いないと代官のお触れがあったが、それを耳にしたのは、磯の上豆四郎、春日野信夫、鉦の鐃八の三人であったが、其夜信夫は健気にも、玉水ケ淵に到り、危く鐃八の手に入らんとした御鏡を入手した。

信夫の家は夫豆四郎と老母小由との三人暮し、寂しい茅屋であった。玉水ケ淵の事件があった翌日、当時殿上人と名うての経有常が乗物行列美々しく小田ノ方を訪れた。有常は実は小由とは、昔馴染の仲で当時は太郎助と云う百姓であった。その上、娘の信夫と云うは小由の子ではなく、実は有常が若かし頃、不興を受けて陸奥を浪々する当時儲けた実の娘で、又現在有常が自分の娘として養育している井筒姫は畏き

辺りの御胤であった。処が惟喬親王が井筒姫を所望して居られるが、姫は在原業平と深い契りを交して居られるので、今は行方不明という事になって居る。其処で有常は、苦肉の策として、我が実の娘と、それに夫の豆四郎が幸いにも、業平生写しないので、二人を御身替りに立てんと、小由方を訪れた。丁度其日は小由の夫六太夫の七年目の祥月命日に当るので、小由は有常に、自ら挽た「はつたい茶」を御馳走した。有常は四方山の話の後奥の間へ入ったが、其跡へ、娘信夫が御鏡を持って帰って来た。夫豆四郎と共に自らが犯した恐ろしき罪を語り合い、母に難儀のかゝらぬ様勘当を受けようと決心する。信夫は色々の動機を造った母から勘当を受けようとするが、母は飽くまでも善人で全然問題にしないので、二人でゴテ〳〵しこいる所へ有常が現れ、信夫と伊勢斎宮に立てん故、娘を返して呉れと頼んだが、母は中に聞き入れない。所へ代官が玉水ケ淵の事件につき信夫、母共に召し捕りに来たので、母の驚くをすかさず有常は、「斎宮ならば如何様の科は有つても命助かる筋も有ふが、敢なき小由の娘ならば是非に及ばず招捕られん。」と云うので小由は是非なく娘を縁切った。いよ〳〵娘の出立に際し、その名残とし、小由は娘の琴と自らの砧との合奏を要求するので、衝立の隔てゝの連弾「妹背川」の切々哀々たる調べの中に、豆四郎信夫は有常の手にかゝる。小由内に隠まわれて居られる、井筒姫、業平の二人は御鏡を手に入れ、首尾よく惟仁親王を畏き辺りの御跡目に立たせる。と云うのである。

それで今度は、」有常」を吉右衛門、「豆四郎」と「業平」二役を我当、「信夫」と「井筒姫」二役を福助、「鐃八」を染五郎、「小由」は大阪から上京して来た莚女と云う配役であったが、「有常」の吉右衛門を外は皆初役であるし、吉右衛門にしても二度目であるから未だ芸が定まって居らず、皆々大分ヘマを演

って居った様である。吉右衛門は「はつたい茶」の件がとてつもなく悪く、莚女は丸で芸風が違うので見られないし、我当の「豆四郎」が予期に反し全々なって居ない。唯福助の「信夫」が一番無難で、細かく云えば欠点も多々あろうが、よく其役を呑み込むで居る様に見られた。先此「春日村」で注意せねばならぬのは、「はつたい茶」では、その「風格」で「有常」の「変り」が最も困難であると思う。同じ世話時代の人物でも「有常」は、『逆櫓』の「樋口」や、『大物』の「知盛」とはその趣を著しく異にしているのである。

「有常」は今では何と云っても殿上人であるから、その品合を失わない範囲で、懐しさの為に世話に砕けねばならない。そして「小由」の純田舎風の無邪気と正直と云う一つの品合と絡み合ってこそ、ほんとうの「はつたい茶」になるのである。其点から云うと、今度の等は丸で噺にならない「はつたい茶」であった。誰であったか新聞の批評に是を、「大体風格を壊さぬ程度に演っている。」等と書いて居られたが、随分酷い事だと思って居るのである。それから「小由」が「有常」の乗物を迎え、驚く件りは、『楠昔噺』「徳太夫内」の婆が「照葉」を迎える時の腹加減と同一であると思う。

次に奥になって、「信夫」の戻りは、彼女は死を覚悟して居るのであるから、淡み込む様な気合がないと駄目である。そして詞遣いは往昔は「幽霊詞」にと迄云い伝うれた事もあった由であるから、始終怖気を持ち、絶望の中に、夫に対する愛情を失わぬ様にせねばならぬ。此処、福助は未だ充分徹底はして居なかったが、腹構えは正しかった事は認め得られる。「豆四郎」とても同然であるが、我当はどう云う物か全々なっていなかった。それから、「小由」と「豆四郎」と「信夫」の三人の取合の間は、「信夫」の詞遣い、腹加減が最も至難で、「テレからさんあんな事云うてじやわいな。」等の詞の盛り方はよく〳〵味わ

ねばならない。総て、此辺は前の「玉水ケ淵」の場がよく腹の中に入って居ないと出来ないと思う。「信夫」と「豆四郎」二人になって、御鏡を見せからは、「信夫」の詞は、何等の怖気もない、当然の事を仕て来たと云う心持の中に、恐ろしい気合が見物に移らねばならぬ。又御鏡を見てからは、「豆四郎」は時代の人物にならねばならぬ。即磯ノ上民部の伜「豆四郎悛情」になるのである。次に「豆四郎」が「信夫」に母の勘当を促す件りは、「豆四郎」の中では最も大切な、至難の所である。「今宵の中にお供して、此所を立退く所存」と「がコレ、そなたは母に勘当受キヤ」との間は腹一杯の間でなければならない。我当の「豆四郎」は此処が出来て居ないから、従って、後の「小由」と「信夫」との取合の時、上手の次の間から様子を窺う所が全然無意味になって来る。

それから勘当の条りになって、「信夫」の切迫した心持と相俟って、「小由」何処までも、無邪気に、正直一遍に、而して品位を忘れぬ様せねばならぬ。

兎に角娘にポン〳〵云われ乍ら、まだ機嫌を取って居る様な母であるから。

「有常」の出は、彼がいよ最後の覚悟をして出て来るのであるから「不幸を尽し愛想を尽かされ、親子の縁を切らずんば、母への孝は立まじ。」の詞には、悲壮なる気持が充満せねばならない。そして大きく上品に、続く物語はサラ〳〵と運び、代官と取持の間は、波瀾が荒くなり過ぎ易い所である。

「小由の魚の間」に舞台が変ってからは、一体に唯、恐ろしい気合が満場に充たねばならぬ。それでこそ、此場の琴唄が、外に比較する物もない程、悲愴になり、それでこそほんとうの「春日村」になるのである。

終りに、『競伊勢物語』の『競』の読み方であるが、普通は、「ハナクラベ」であるが、文化六年九月の中村座の折は、「スガタクラベ」とあり、嘉永三年五月河原崎座の時には、「クラベコシ」と読まして

居る。其他、伊原青々園氏の「日本演劇史」には、「ハデクラベ」とあり、帝国文庫のは、「ダテクラベ」となって居る。大正四年八月の帝国劇場上演の節は、「スガタクラベ」と読仮名が付いて居り、今度は、「ハナクラベ」になって居る。何れにせよ、書卸しの丸本に読仮名は付いて居ないが、初演の番付（即安永乙未四月大阪中の芝居）には、ハッキリと、「ハナクラベ」と仮名が付けてあり、又二度目の上演の天明三癸卯四月大阪中の芝居の番付にも歴然と、「ハナクラベ」と振仮名が付いて居るから、「ハナクラベ」が一番正しいものであろうと思う。

［備考］（8）・6八月二日…八月十二日（『近世邦楽年表　義太夫節之部』）
競伊勢物語　安永四未八月十二日（『外題年鑑』）
（9）・16其後二代土佐太夫の播摩大掾が鶴沢寛治と共に勤め、大いに此曲の改善を施し、好評を得て度々語ったので…文化八年七月吉日　三段目切　土佐太夫（『義太夫年表　近世篇』）
文化十年七月十七日　三段目切　土佐太夫（同）
文政八年正月二十三日　三段目切　播磨大掾（同）
文政九年九月　春日村　切　播磨大掾（同）
(10)・2先年大阪文楽座で、豊竹古靱太夫が此「春日村」を上演したが…昭和五年十月
(10)・3又近世では三代目長登太夫も語り…文久元年三月三日　春日村　切　長登太夫（同）

(10)・４大椽が彼の名人団平を相三絃とした東一回の演し物が此春日村であったと思う

…明治十年九月廿四日より　松島文楽　伊勢物語　春日村　三味線団平となる

（「竹本摂津大掾興行年表」『竹本摂津大掾』）